

# 仮想世界は人間を救うか

二〇一六年二月

齋藤正男



## 序 文

いま人々は激しく変わっていく。生活や考え方が一様で浅はかになった。端末のキーを叩いて気持ちが通じたと思ひ、料理や芸事に励むだけで個性的だと思ふ。しかし例外的な人を別とすれば、人々は心にたぎる感情を忘れ、個性的に生きることを忘れてしまった。

学生が先輩のレポートのコピパを持ってきたので、せめて誤りを指摘すると、彼は訂正もせずに「先輩と同じ点をください」。皆がこれほどひどくはないだろうが、感情も個性もなく、ベルトコンベアの上の機械部品と変わらない。

機械が本来どこまで人間を助けるべきであったのか。人間は既にその線を越え、欲望を満たすために機械の助けを借りている。機械が便利になって人間は頭と体を使わなくなった。頭を使わない人は歯車と同じで、止められなければどこまでも回り、歯止めがあれば止まる。判断も行動も刹那的、短絡的になる。「俺は思慮深く行動している」と言う人もいるが、十年前の自分と比較してほしい。昔はもつとよく考えたものだ。

短絡的になって個性と感情が薄れた。実際、戦争や災害を生き抜いた人々に比べるといまの若者は

弱い。ハイテクに助けられても本当は何もできない。生々しい経験とそのときの感情が生きる芯になる。戦後七十年として少年達が戦争体験を聞き取りまとめている。「この人は平和を祈念しつつ戦闘に参加した」と書いているが、平和を念じつつ銃を撃つ兵士などいない。獣のように相手を殺す気が怖いのだ。しかし少年はそれを理解できない。

実際に生々しい感情を経験をしなければならないのだが、そのような出来事は少ない。経験を増やすには非現実（仮想）の世界に期待しなければならぬ。仮想世界とはアニメやビデオだけでなく、もっと広い範囲のものである。現実世界を補い、人間をより強く育てなければならぬ。

人間は自然の中で慎ましく暮らしていればよかったのだが、欲望を膨らませ、機械の助けを借りると文明社会が築かれ、さまざまな危機を生じている。また人間の特性とも大きなミスマッチを生じている。我々はこれらの壁を越えられるのか。

この本では理解を容易にすること主体とし、割り切った説明を試みた。御叱声を期待する。

二〇一六年 一月

齋藤正男

## 目次

### 第一章 人間社会の崩壊

一

慎ましく生きる、欲望という悪魔、悪魔の誘惑、  
機械という燃料、頭と体を使わない、  
人々は一様になる、どこまでも頼ると、  
何を失ったのか、循環する作用、  
次世代に期待しよう、仮想世界は役に立つのか

### 第二章 仮想世界とは何か

一五

「仮想」とは何か、心の中の世界、物語性と想像力、  
予測能力、夢の場合、妄想、人工仮想世界

### 第三章 人間は感情で動く

一三三

人間は機械と違う、人間は情動駆動、  
機械流思考が増える、神経回路網、興奮の波動、  
静的パターンと動的パターン、幅のある受け入れ、  
学習と個性

### 第四章 文明とのミスマッチ

一三二

個性の倉庫、整理して入れなければ、整理役はいるが、  
世界の混乱、人間の多様性は貴重だ、  
機械の助けはないのか

## 第五章 滅亡からの脱出

三九

目の前の危機だけか、一様化は避けられない、  
安易な姿勢、愛情は姿勢正しく、ネットの向こうは、  
個が消滅する、一様性対個性

## 第六章 仮想世界の出番

四七

強い人弱い人、なぜ経験しなければ、  
仮想世界に入り込む、立つ位置と目線、移住の背景、  
滞在を続けるには、移住の仕組、人工仮想世界の氾濫、  
旅行靴

## 第七章 再び人間と機械は

五六

昔を思い出して、人間の思考も、人間は複雑だ、  
人間機械論との対決、共鳴現象、異世界通信、  
無謀な突進も

## エピローグ

六四

## 第一章 人間社会の崩壊

慎ましく生きる

地球に現れた原始人達は体力もなく、猛獣の餌食になり、あるいは餌を先取りされるなど、動物達の仲間にも入れてもらえなかつたが、やがて脳が発達し、火や武器（まとめて機械と呼ぶ）を発明して、他の動物達と対抗でき、一人前の顔ができるようになった。

しかし人間は強くなつてすぐに動物達を征服したわけではない。自然界の仲間の一員として慎ましく競い暮らす時代があつたようだ。代表的な例を途上国の漁師に見る。彼等はその日の分だけ魚を取れば漁を終える。「それは立派なことだ」と学校の先生が教えるが、彼等は別に立派だと思つてそうしているわけではない。先祖からの習慣に従っているだけだ。

はるかに遡ると、先祖達は魚を乱獲すると、その影響は資源不足などになつて自分達に振りかかり存在を危くされたのかもしれない。そのような経験を繰り返して「慎ましく生きる」習慣を身に付けたのだ。子孫達はその習慣を受け継いでいるに



すぎない。いま自然界に生きる猛獣も、餌を乱獲しないで残すことがある。先生は「漁師は立派だ」というが、それよりもっと大事なこととして、「人間が自然界の一員として慎ましく生きた時代があつた」ことを教えるべきではないか。

「人間が自然界の一員として慎ましく生きる」ことこそ人間の本来あるべき姿なのだ。しかし残念なことに、人間はそこから飛び出してしまった。それは大きな誤りであり、人類滅亡への道である。慎ましく生きるにしても、ほどほどに食べ、水を飲みたい意欲がある。慎ましく生きるためのそれらの意欲を「欲求」と呼ぶ。

### 欲望という悪魔

慎ましく生きていても、狩猟や農耕の技術が進み、生活に余裕ができると、「労力少なく生活したい」、「騒いで楽しみたい」などと余分な意欲が出てきた。それらの意欲は、本来生きる努力から派生したもののだが、なくてもよい余分なものである。はみ出した意欲を「欲望」と呼ぶ。欲望は、実は人間を墮落に誘う悪魔である。

たまには御馳走を食べ、酒を飲んで騒いでもよいではないか。確かにそうだ。年に一度のお祭りに

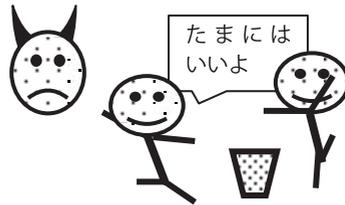
浮かれても、自然界のバランスが崩れるはずはないし、やりすぎたら長老がたしなめてくれるだろう。

これらの人間の欲望は、本来の生きる努力につながっている。例えば、できるだけ栄養に富んだ食事をして明日に備えるべきであり、それを心がけているうちに美食の欲望が育ったのだ。そこまでは欲望に罪はない。

しかしやがて人々は、欲望が生きる努力につながっていたことを忘れる。旨い物を食べた人はさらに旨い物を求め、レストランに入る。そのとき人は「生きるために旨い物を食う」とは思わない。

### 悪魔の誘惑

欲望が悪魔と言われるわけは、人間に働きかけてどこまでも欲望を膨張させる点にある。人間がもつと何かを欲しいと思うとき、欲悪魔はどこまでも人間の欲望を膨らませる。しかし自然界ではたいいていの場合限界がある。牛肉を食べたいと思っても牛はそれほどの数はいない。しかし限界のない欲悪魔もいる。例えば飲酒の場合はどうか。手持ちの酒に限界があれば、酒盛りも欲悪魔もそこで終わり



悪魔が覗いている

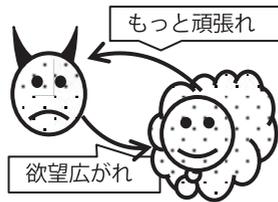
になるが、酒が限りなくあれば、人間は欲悪魔をけしかけ、どこまでも自分の欲望を膨らませ、破滅に至るだろう。ここで人間は燃料を与えて欲悪魔を勢いづけ、欲悪魔は人間の欲望を膨らませる。ここで人間と欲悪魔の間に循環作用ができています。

もしここで人間が自然界の一員として慎ましく暮らす自制心を失っていないければ、人間から欲悪魔に向かう道は切断され、欲望は抑えられる。慎ましく生きるという意識は、この循環路に沿って人間が墮落するかどうかを決める鍵になる。

しかし自制心のない人間は、頭を働かせて欲望を膨らませる。牛が足りなければ牧畜を始め、林を焼き払って開墾をする。それはいずれ環境を悪化させ、自滅に向かう。

### 機械という燃料

人間は、欲望を膨らませるために機械という不思議なエネルギー源を用意した。もともと機械は、弱かった人間を他の動物並みに引き上げるために助けてくれたので、機械の任務はそこで終わり、人間はそこから踏み出すべきではなかった。しかし不幸にして頭脳の優れ



た人間は、機械をどこまでも進歩させた。

昔、新幹線が走ったときには、「そんなに急いでどこへ行く」と言われた。しかしいま人はリニア新幹線を期待している。大金を払ってビフテキを食う人、月給の何分の一かを払ってワインを買う人などを見れば、欲望に限界がないことを知る。

これらの贅沢な欲望を満たすために、人々はまたも機械を利用した。「あそこに旨いものがある」ならば、歩いて取りに行けばよいのだが、「早く食べよう」と自動車に乗る。欲望を満たすために利用する機械を、「便利だ」と言う。「生きる」機械から「便利な」機械への拡大は、大きな間違いであった。

## 頭と体を使わない

人間は、慎ましい生活の線を越えて機械に頼るべきではなかった。しかしブレーキのかからない人は、「努力したくない」という欲望に応えて、機械を高度化し、自動化し、知能化した。

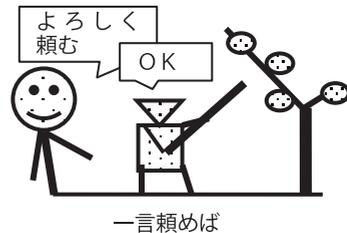
電気釜はスイッチを入れるだけで飯を炊いてくれる。洗濯機は放り込まれた衣料の量や汚れかたに応じて働いてくれる。ごく簡単な指示をすれば後は機械がすべてをやってくれる。

人間は体も頭も使わず（頭と体の怠け癖と言う）機械に頼って生きていくことにした。

機械に頼ると人間は簡単になる。機械は「ボタンを押せばモーターが回る」というように、「こうすればこうなる」と単純で論理的に動作する。人間はもともと気まぐれで論理的な行動などしないのだが、機械の流儀に合わせて暮らすうちに、機械流に短絡的に物事を考えるようになる。いま車に乗ると、「ペダルを踏めば車が動く」としか考えない人が多い。機械と同じように単純かつ論理的に考え行動する人を、「機械流」と言う。世の中はしだいにそのような人達で満たされるだろう。

「お前は機械と同じように単純だ」と言われると、「そんなことはない、私は深く考えている」と反論する人もいる。しかし十年前の自分といまの自分を比較してほしい。忙しくメールやケータイに追われ、問合せに即答し、要請には直ちに行動する。昔はもつと頭と体を使ってよく考えたものだ。

機械は二つの道で並行して影響を生じた。欲望魔には人間が機械という強力なエネルギーを供給し、欲望魔は人間に頭と体を使うことを忘れさせた。それらの影響は、これからも続き、人間を滅亡に導くだろう。

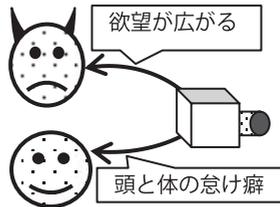


## 人々は一樣になる

機械は人間にさまざまな変化をもたらす。それらは「一樣化と反逆」に集約されるだろう。よりよい生活を目指す人々は同じようなライフスタイルになる。狩猟や農耕で暮らす人は、隣の部落のよい方法を見ればこちらもその真似をする。社会の制度や秩序もそうだ。他国の様子を眺め人々の意見を入れて改良するうちに、皆が納得して一樣な制度の下で暮すようになる。

一樣な生活は気楽だ。毎朝出勤し制服を着て、職場で決まった挨拶を交わせば落ち着く。草を食む羊の群れのように何も考えずに毎日を暮らせば平和である。つまり社会は、時代の経過とともに一樣化する。

しかし人間にはそれぞれの個性があり、一樣ではない。ときには社会の一樣性に反逆して、変わった服装や食事をし、大声で叫ぶなど、他人と違う行動をしたこともある。一樣性への反逆は、たいははじかれて消えてしまうが、たまには生き残り、世の中を新しい方向に導く。つまり人間を含む生物は、一樣性と反逆を対立させつつ緩やかに進化して行く。



機械の二つの作用

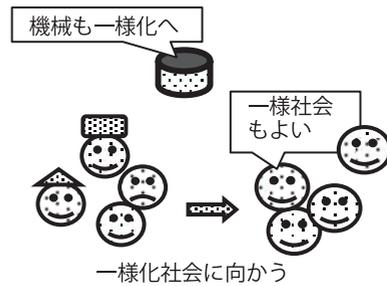
ところが機械が急速に進歩するとこのバランスが崩れた。大勢の人々が様な生活を始めると、同じような機械が大量生産され、性能のよい製品が安価に提供される。一樣性に反抗して自分の好みを主張すると、費用がかかり修理も面倒である。

人々は標準製品に妥協して、様なライフスタイルになる。同じ時刻に仕事に出かけ、終われば同じような食事をし、同じテレビ番組を見る。様な生活に抵抗感はないから、人々はそこに安住する。

### どういまでも頼るんや

これからも人間は欲望を膨らませ、機械に仕事を頼むだろう。人間に代わって仕事をする機械は、「ロボット」と呼ばれる。なんでも頼みたいが、まだ世の中には打音検査や都市計画のように、人間の感性や広い視野が必要な仕事があり、ロボットには任せられない。

しかし時代とともに人間は変わる。勤め帰りに出来合いの惣菜を買う主婦が増えたように、社会の仕組をロボット向きに作り直せば引き受けてもらえる。労働だけではない。コンピュータが頭脳を変

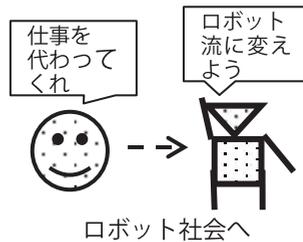


わってくれ、偶然の出来事から人間と同じような発見をするだろう。研究や芸術などの人間の聖域さえも、ロボットが引き受けてくれる。

ロボット社会になると多数のロボットが活動する。彼等は通信を交わして協力するが、人間は何が起きているかわからない。「手伝おう」と介入すると、かえって混乱するから何もできない。

ロボットはせつせと働き、人間はいわば技術革新に乗り遅れた老社員のように「蚊帳の外」に押し出され、することがない。「機械ができることは機械に任せて、人間は人間らしいことを」と気取ってみても、閑になった人間は碌なことをしない。多くの人は低俗な遊びに耽る。

蚊帳の中でロボット達は忙しく働き、人間不在の社会の活動を維持する。社会にとって人間は不要な存在になるが、絶滅させても意味がない。これでは人間は何のために地球に現れたのか。



何を失ったのか

ロボット達が働き、人間は何もしないという構図は、どこを間違ったのか。反省もなく欲望にひかれ、どこまでも機械に頼って機械流になった人間は、個性と感情を失ったのだ。

一様に生産される機械には、製造番号だけで個の区別がないし感情もない。人間が機械流で機械と付き合うかぎりは、個性も感情も要らない。刹那的、短絡的に行動すればよい。街を歩くと、ぶつかりそうになっても我が道を平気で歩く人を見る。既にロボット化したようである。

本来人間は、生まれてからさまざまな経験を積んで個性を構築する。個性はそれまでに獲得した知識と知恵の静的な倉庫であり、感情は、外からの信号を受け取り、状況を判断し、行動の指令を出す人間の動的なエンジンである。この二つが組み合わされて人間の個性と感情のシステムを作る。それを欠いては人間とは言えない。

循環する作用

欲悪魔は人間の欲望を膨らませ、人間は機械という燃料を欲悪魔に送る。この循環は何なのか。慎